

「人事を尽くして天命を受け容れる」

元陸上自衛隊 陸将
第1師団 師団長

反怖 謙一



私は元自衛官という職業柄もあり、常に物事は自らの思惑通りには行かず、時には思惑を大きく超えて展開するのが通常と考える癖があります。それでなくとも自然界という人智を超えた世界で営まれる日常生活の中で有事となれば、敵と味方という究極の立場に身を置いて、互いに死力を尽くします。このような行動を前提とする以上、あらゆる場面が想定外であり、常に想定外を想定して先手先手と行動することが強く求められます。実に、思い通りにならないことのオンパレードの世界です。そうした世界を生業として来た人間として、一つ皆様に是非ともお伝えしたいことがあります。それは「受容力」です。

日々の体験を通じて、“器”を大きく練り上げる

人間は、何事につけ、自分の思う通りにならないとき、あるいは自分の都合通りにことが運ばなかった際には、誰もが必然的かつ否応なく、否認、怒り、取り引き、抑鬱、受容の5つの反応過程を辿ります。これは人間の本能的反応過程であり、それ自体はどうにもならないものです。しかしながら人間は、自らの意思で自ら望む反応を作り出せる生き物らしく、自分の努力次第で、否認、怒り、取り引き、抑鬱の前4段階をカットした上、すべてを飲み込み、胃の腑に落とし溶かし込んで、“受容”をスタートラインとして対応や解決への一步を雄々しく踏み出すことが出来ます。その受容力ある状態を、“器”に例えて、器量とか、度量、器度とか、その懐の深さが表現されます。すなわち、“器”とは、どんなに過酷であろうとも、自分に与えられた境遇や環境、事態を素直に

あるがまま受け入れる受容力のことであり、人間は“器”が大きくなることによって、心穏やかで安心、安堵、安定した気持ちを取り戻すことが出来ます。

しかしながら、“器”は自然には大きくなりません。“器”を大きくするには、悲壮な覚悟と決意の下、己の内なる“器”にエイトばかりに自分の指を突っ込み、切腹するように、鮮血を流しつつ、激痛に耐えながら、これを切り裂かなければなりません。そうして時間の経過とともに、傷が修復され、今の自分の境遇や環境、事態の受け入れに丁度良い、ピッタリの大きさの“器”となります。私達は、日々の体験を通じ、紙一枚を重ねて行くように、“器”を大きく練り上げて行く訳です。

天与の賜物として素直に受け容れる

箴言に「順調な排出作用は、順調な消化作用からもたらされる。今日の苦勞を心の中

に溜め込んでいては、病気になってしまう。それを外にスルリと出してしまうためにも、これをよく消化することが重要だ」というものがあります。が、“器”を大きくするとは、まさに強力な消化能力を持つということなのでしよう。私はこうした受容力の大切さを踏まえ、“人事を尽くして天命を待つ”という格言を「人事を尽くして天命を受け容れる」と自己流に言い換えています。「待つ」というとどうしても、そうなることへの期待感やそれへの執着を想起してしまうためです。やるべきことをやり切ったならば、如何なる結果がもたらされようと、己に取っての好悪にかかわらず、これを天与の賜物として、そっくりそのまま素直に受け容れようと捨て身の覚悟をした方が、余程地に足が着き、さっぱりと落ち着いた、爽快な自然体の気持ちで、従容たる^{じようたう}“以て瞑すべし”の心境を得ることが出来ます。

私達は生まれてこの方、日々の生活の雑事に翻弄されながら人生を生きています。決して上手とは言えない失敗ばかりの生き方かも知れませんが、器用は器用、不器用は不器用なりに精いっぱい生きています。日々あらゆる場面で、出来不出来は有っても、人事(自分という人間が出来る事)を尽くしていることは事実です。ただ問題は、自分中心の利己的思いから離れられず、自分の都合通り、思い通りにしたいとの

強い欲求に捕われ縛られていることです。当然、事の結果が我が意に沿わず、思い通りにならないときには、怒りや不満、愚痴、泣き言、文句がパレード状態となり、ここに他者との比較が入ることで、妬み、嫉み、憎悪、呪詛^{じゆそ}までが華やかに加わります。誠に生きづらくなることこの上無しです。この生きづらさを何とか軽減し、人生を生き易くしようとの教えが仏教です。

受け容れることで解^{ほど}けられる

仏教では、思い通りにならないことを「苦」として、この苦の原因を明らかにし、この苦から脱し、解放されて(解脱)、晴れ晴れとした不動の安心というか、安定した平安な心持ちを得るための方法論を説きます。私流に解釈すれば、仏とは「ほどけ」、いわゆる、あらゆる苦に縛られている状態から「解^{ほど}けた人」のことです。自分で自分を縛ってしまう自縄自縛のS M的悪癖を脱し、縛りを解^{ほど}くアプローチ論です。仏教の難しい法理は別として、要は煩悶の原因である「苦」をスッパリ捨てられれば良い訳です。ところが、いくら捨てようにも、捨てられる世界が何処にも出て来ない。逆に、苦しむ今の自分の姿こそ自分の真に生きる姿なのだと、見

界が生まれて来ます。捨てるのではなく、受け容れることで解^{ほど}けられ、捨てると同様の結果がもたらされる世界です。

この受け容れることをイメージ出来る話があります。「私達は、美しい夕日の沈む空を眺めながら、あの雲はもっと赤い方がいいとか、こちらの紫の雲は黄色で無いから駄目だとか、そのように思いながら眺めることがあるだろうか。おそらくは、美しい落日の光景をあるがままに、全体として感動をもって眺めるのではないだろうか。物事をあるがままに受容することは、夕日の光景を味わうことと同じなのだ」。「人事を尽くして天命を受け容れる」。人は、受容により救われます。

反怖 謙一(たんぶ けんいち)

1979年防衛大学校卒業、陸上自衛隊入隊。98年米国陸軍戦略大学留学、その後東部方面總監部防衛部長、北部方面總監部幕僚長兼札幌駐屯地司令を歴任。2012年陸将 第1師団(司令部:練馬)師団長に就任し首都圏の防衛・警備、災害派遣、国家行事支援の任務に携わる。14年陸上自衛隊退官。その後(株)三井住友銀行人事部研修所顧問、銀泉(株)研修所顧問に就任。自衛隊での経験を活かし、リーダーシップ・マネジメント・部下指導等、様々なテーマで研修講師として活躍している。